

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 37 回 第 10.1 節～第 10.1.2 節

2019 年 7 月 1 日

小 田 勝

前回の補遺稿 (85 頁) で「ましや」の節を新設したが (第 9.6.1.2 節)、「…ましよ」はまた表現性が異なると思われるので、付記する。次のような「…ましよ」は、「… [ましかば悪しから] ましよ」の意である。

- ・ [柏木ノ文ガ] げに落ち散りたらましよと、うしろめたういとほしきことどもなり。
(源・橋姫)

また、補遺稿第 33 回 (78 頁) で新設した「9.2.1' 問いの「や」と詠嘆の「や」」について、「…ずや」の例もあげておく。

- ・ [私 (薰) ノ大君ニ対スル気持チハ] 世の常のなよびかなる (=色恋ノ) 筋にもあらずや (=ナイノダヨ)。(源・総角) <詠嘆>
- ・ 妻恋ふる鹿ぞ鳴くなる女郎花おのが住む野の花と知らずや (古今 233) <問い>
- ・ あかねさす^{むらさきの}紫野行き^{しめの}標野行き^{のもり}野守は見ずや君が袖振る (万 20) <反語>

さて、今回から「第 10 章 形容詞と連用修飾」に入る。262 頁「10.1.1.1 形容詞語幹の名詞修飾用法」。類例をあげる必要はなからうが、一応次の 1 例をあげておく。

- ・ 君を思ひなまなまし身を焼く時はけぶり多かるものにぞありける (大和 60)

次例では、固有名詞を修飾している。

- ・ 大和の青香具山は (万 52)

同頁◆の 2 行目、「終止形が名詞に接している。」は、「ク活用の終止形が名詞に接している。」と書くべきであった。類例、「荒し男 [安良志乎] すらに嘆き伏せらむ」(万 3962)、「友なし千鳥」(新続古今 667) など。

263 頁「10.1.1.3 感動の意を表す形容詞語幹」では、「あな…」の句型 (用例(1)(2))、「あな…や」の句型 (用例(3))、「あな」も「や」もない句型 (用例(4)～(11)) をあげたので、残ったパターン、「あな」を伴わない「…や」の例をあげる。

- ・ 「暑や」とて袷の御小袖の御胸を引き開けて、ふたふたと扇^{あふ}がせ給ひし御姿などまで (たまきはる)

「あな、ゆゆしともゆゆし」(堤・虫めづる姫君) は、この句型の反復強調形 (§2.12.3)

である。次例では、主語を伴っている。

- ・「花の面白。出でて見よ」とあれど、風邪おこりて（中務集・詞書）
- ・あな、ことも忝なや。（保元・金刀比羅本）

同頁1つ目の◆の類例を追加する。

- ・横ばしる葦間の蟹も雪降ればあな寒げとや急ぎ隠るる（為忠家後度百首）〈平安後期としては奇想というべき歌〉

264 頁3つ目の◆、「こはいかにし給ふぞ。あな、けしからず。」（源・夕霧）も「あな…終止形」の句型である。

同頁「10.1.1.4 形容詞語幹の名詞用法」。初刷・第2刷で、説明文の末尾「用いられる」に句点が落ちていたので、第3刷で「用いられる。」と句点を付けた。類例、

- ・「御棺を遠なりとも（=遠クカラデアッテモ）今一度見せ給へ」と申ししかども（とはずがたり）

同頁「10.1.2 ク活用・シク活用」。村田菜穂子（2005:38）によれば、中古散文中の形容詞（異なり語数）は、ク活用が738語（66%）、シク活用が386語（34%）という割合であるとのことである（ちなみに、八代集ではク活用210語〔78%〕、シク活用61語〔23%〕。形容詞はク活用の語が多くて、全体の3分の2を占める。

拙著『読解のための古典文法教室』（和泉書院2018年4月15日第1刷刊）が、お陰様で、重版（第2刷）となった（2019年5月30日刊）。第2刷での誤記の修正は、次の13箇所である。(1)29頁下から1行目「すなわち④は」→「すなわち②は」（本補遺稿第12回で指摘）／(2)41頁例題54「られる」よね。」→「られる」ね。」（補遺稿第18回で指摘）／(3)101頁用例(22)「思イツメナイヨウニ」→「思イツメナサラナイヨウニ」（補遺稿第22回で指摘）／(4)110頁下から7行目「[121] ①のように」→「[121] ②のように」／(5)157頁用例(34)の上「⑥は」→「⑤は」／(6)241頁例題275「次の文」→「次の歌」／(7)241頁例題275④「声かをる」→「声かをる」／(8)242頁例題276「次の文」→「次の歌」／(9)249頁例題285③「つてことに」→「つてごとに」／(10)別冊2頁[14] ③「死んでしまった子」→「死んだ子」（補遺稿第10回で指摘）／(11)別冊4頁[40] ①「見るだろうか。」→「見るだろうか（第5句は難解で、諸説ある）。」／(12)別冊14頁下から4行目「でございます」→「でございます」／(13)別冊35頁[285] ②「度ごとに」→「ついでごとに」

【出典追加】中務集①中務（伊勢の娘。989年以後没）③新編国歌大観7

【引用文献追加】村田菜穂子2005『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院